

国語における名詞修飾表現

Is teaching relative clauses grammatically useful or useless in *Kokugo* ?

山田 敏 弘*
YAMADA Toshihiro

1. はじめに

岐阜県の中学校で多く英語の教科書として採用されている東京書籍の“NEW HORIZON”では、中学校3年生で関係代名詞を学習する（引用するページは平成15年度版による）。

(1) This is a book I bought in America .

(2) Carson is the scientist who wrote *Silent Spring* .(NEW HORIZON pp .66 - 67)

説明には「I bought a book .の語順をかえて、a book I bought とすると、『わたしが買った本』という意味になる。(同:66)」「『...を書いた科学者』という意味。人について説明を加えるときは、関係代名詞の who を使う。(同:67)」「物について説明を加えるときは関係代名詞の that または which を使う。(同:68)」とある。

このように英語では必ず関係代名詞表現を「学習」する。

英語で必ず関係代名詞を学習するのは、さまざまな参考書もあわせ、その説明から察する限り、日本語にはない関係代名詞を人か物かで使い分けただで語順を変更するという複雑な操作によって得られる複雑な文章であるからというのが大きな理由であるらしい。

日本語でこれに対応するのがいわゆる名詞修飾（連体修飾）表現である。日本語では、関係副詞のような関係代名詞に近接する表現から英語の同格節に相当する表現までを含め、修飾される名詞（以下、被修飾名詞）の前に置かれる述語を伴った¹従属節（名詞修飾節）が、従属節を名詞に先立たせるという語順の操作のみによって修飾関係を表し、名詞に対していくつかの意味・情動的な付加を行う。英語と異なり、このような場合に修飾節を表すマーカーは存在しない。そのため、日本語の名詞修飾表現は日本語母語話者の意識に上りにくい表現となっており、当然、母語学習、すなわち日本でいう「国語」において、名詞修飾の「正しい」文法や運用が教えられているという話はずいぶん聞かない（その一方で、いつまでも「連体形」が活用表には残っているのだが）。

しかし、日本語の名詞修飾表現は、詳しいことは次節で述べるが、決して簡単なものではない。構造こそ簡単だが機能は非常に複雑であり、このような名詞修飾表現が正しく用いられることは、国語学習においてさまざまな効果をもつと考えられる。

本考察は、名詞修飾の意識的な学習が国語の中でどのように位置づけられるかを考察する試論である。

考察の手順としては、まず、第2節において日本語の名詞修飾表現を、日本人がこのような構造を意識的に学びきっかけとなる英語の関係節と比較して簡単に示す。その後、第3節で実際に国語の教科書において用いられている名詞修飾表現をいくつか取り上げてその文章上の機能を概観し、さらに第4節では児

* 岐阜大学教育学部国語教育講座

1) 指定辞が名詞修飾節の述語になる場合には、「の」によって節が名詞を修飾することもある。

() 親が医者の 子 は、医者になる。(cf. その子の親は医者だ。)

童生徒の実際の作文を名詞修飾表現という観点から検討しながら、今後の国語教育における名詞修飾表現の取り上げ方を検討する。

なお、本考察では、名詞修飾節に下線()を、被修飾名詞に枠()をかけて示す。

2. 名詞修飾表現の分類

日本語の名詞修飾表現を日本人が初めて意識的に学習するのは、英語学習の際である。すでに多くの知見のある英語の関係詞について、限られた紙幅で十分に述べられるものではない。そのため、ここでは、英訳もしくは英文和訳の際に問題になりそうな点を中心にとりあげながら、日本語の名詞修飾表現の概略を示していく。

2.1 内の関係の限定的名詞修飾における名詞修飾節内の格

日本語の名詞修飾表現は、被修飾名詞が名詞修飾節内の述語と格関係をもつ内の関係の名詞修飾と、そのような格関係が存在しない外の関係の名詞修飾の2つに分けられることが、寺村秀夫(1975)以来、定説となっている。

内の関係の名詞修飾については、白川博之(1987)など、多くが被修飾名詞の名詞修飾節内の述語に対して取る格の問題を取り上げている。

日本語では、英語の関係代名詞節と関係副詞節は区別せず、すべて名詞に前接する節によって表される(対応する英語表現についてはCelce-Murcia & Larsen-Freeman(1999:579)より引用)。

- (1) バスク語をしゃべる 少女 (cf. the girl who speaks Basque)
- (2) 君があつた 人 (cf. the man who(m) you met)
- (3) 私が本を渡した 男の人 (cf. the man that I gave the book)
- (4) 君が話している 場所 (cf. the place which you spoke about)
- (5) 私たちが会おうとしている 場所 (cf. the place where we're meeting)

(1)~(5)のうち、(5)を除くすべてが英語のいわゆる関係代名詞を含む表現に相当し、(5)は関係副詞を含む表現に相当する²⁾。すでに井上和子(1976:第3章)および、Keenan & Comrie(1977)などが示すように、特別な形式によって名詞修飾節を表示する手法をもたない日本語と、関係代名詞・関係副詞によって修飾関係を明示する英語とでは、語順の他に、表せる被修飾名詞と名詞修飾節内の述語との格関係が異なる。

たとえば日本語においては、名詞修飾節内の述語に対してカラ格をとる名詞を名詞修飾表現によって表すことはできないが、英語においては表現可能である。

- (6) The child from whom you took the candy/whom you took the candy from is crying (Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999:572)

(6)'? 君がキャンディーを取った 子 が泣いてるよ。

英語でも実際には比較の目的語が関係化されにくい(object NP of a comparison (least accessible or least able to become a relative pronoun): *ibid.*:572) こともあるが、英語の方が、概して日本語よりも被修飾名詞が名詞修飾節内の述語に対してとる格を表しやすい。これは、日本語では従属節の格を顕在化させる手法をもたないためであり、少し拙いが代名詞など自立語成分を介在させることによって、それらしい文章はできる場合がある。

- (7) 太郎がそこから自転車で高校へ通った 名鉄の忠節駅 は、まもなく廃止が決まっている。
- (8) 私がそこまでタクシーに乗った 梅田駅 はラッシュ時でごった返していた。(山田敏弘 2001a:396)

2) 当然のことながら、関係代名詞や関係副詞という分類は英語の代名詞・副詞という分類によって分けられるものであり、日本語の分類になんら意味をなさない。

2.2 被修飾名詞が「の」で代行される場合（主部内在型名詞修飾）

日本語では古くから名詞修飾表現を次のように連体形述語のみによって表すことが行われていた。山田敏弘（2001a：396）でも挙げた例を次に挙げる。

(9) 友の遠方よりこれをもてなす。

(10) 同じ帝、立田川の紅葉いとおもしろきをご覧じける日（大和物語）

これらは「遠方よりこれる [友]」「いとおもしろき [立田川の紅葉]」という名詞修飾表現と同様の内容を表す。

(9)と(10)のような被修飾名詞を修飾節内に残す方法は現代語においてもよく見られる。このような名詞修飾の方法は、ヘブライ語などの言語に見られる名詞修飾の方法と同じとも言われ、黒田成幸の一連の研究の他、レー・バン・クー（1988）に詳細な報告がある。レー・バン・クー（1988）からの孫引きになるが、いくつか挙げておく。

(11) 花の机の上に、書きかけのカードが積んである [の] を、所在なく絵里子は読んでみた。

(12) 白衣の襟のつまった [の] を着た看護婦が二人ベッドの頭と裾に腰掛けて静かに団扇の風を送っていた。

(11)と(12)の「の」は、それぞれ前接する修飾節の中にある「書きかけのカード」「白衣」を受けており、「積んである [書きかけのカード] を、所在なく～」「襟のつまった [白衣] を着た」とほぼ同様の内容を表す。一方で、(11)は存在の現象描写文という新情報の表現と主題化された登場人物についての叙述という効果を持ち、また(12)は「白衣」という全体から「襟」という部分への視点の狭まりという人間にとってより自然な捉え方をする点で、一般的な「計算された」名詞修飾節とは異なる。いずれにしても大きな問題であるので、別に考察の機会を設けることとして、ここでは第4節との関連で現象の指摘にとどめたい。

2.3 いわゆる相対的な名詞修飾表現

いわゆる相対的な関係にある名詞修飾表現についても、英語との対象において捉えておく必要がある。相対的な関係にある名詞修飾表現というのは、次のようなものである。理論的にどう捉えるかは別の問題として、ここでは日本語に現れやすい性質としてのみ指摘しておく。

(13) 富山に行った [翌日]、大阪での仕事にそのまま向かった。

(14) 菜穂子が座った [横] に、昔別れた彼が座っていた。

(15) 今回帰国した拉致被害者たちは、死亡したと伝えられた [家族] と面会しました。（2002.10.17 日テレ ズームインスーパー）

(13)～(15)は、「富山へ行った日の翌日」「菜穂子が座った場所の横」「死亡したと伝えられた人の家族」のように、波線部を端折ったような表現となっている。英語でも“the next day”については同様に言えるようであるが、このような相対的な名詞修飾表現をそのまま英訳して“on the next seat on which Nahoko sat”，とすると、意味が変わってしまう。(15)に至っては、日本語としても一瞬「家族が死亡したと伝えられた」と聞けてしまう。

被修飾名詞が名詞修飾節内の名詞を連体的に修飾する場合、次のようにいうこともできる。

(16) 下に少年が入り込んだ [テーブル] が、倒れた。

(17) 妹が科学館に勤めている [人] が知り合いにいるから、実験講座があるか聞いてみよう。

「～の下(に/で)」「～の右(に/で)」「～側(に/で)」など位置関係を表す前置詞相当句や、人間間の関係など相対的な名詞の場合にはこのような表現が可能である。

また、相対的に決まる名詞が被修飾名詞となった場合でも、その名詞が名詞修飾節の主語となっている(17)のような場合はよいが、次のような文は和訳しにくい。

(18) The man whose wife you are admiring is a wrestler (Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999: 581)

(18) a. ?君が妻にあこがれているその男は、レスラーだ。

b. 君があこがれている女の旦那は、レスラーだ。

この場合、英文では「その男の妻」という所有関係が表されているが、日本語でそのまま(18a)のよう

に表すとやや不自然に感じられ、(18b)のように、関係を裏返して「女の旦那」と表現したほうが自然である。英語と日本語は語順が異なるため、相対的に決定される名詞の提示順が異なるのである。

2.4 内容を表す外の関係の名詞修飾表現

日本語の名詞修飾表現の中には、内容を表すものも存在する。

(19)喫煙ががんの原因であるという「意見」を持っている人もいる。

(20)彼にはそんな仕事をする「力」はない。

(21)遠くで子どもたちが笑う「声」が聞こえる。

日本語においては、このような内容を表す名詞修飾表現は、「という」の介在の有無についてルールが存在する。(19)のように発話や思考の内容を表す場合には「という」は必須であるが、そのほかの内容については(20)のように「という」を必要としない。また、(21)のように、結果として産出された感覚の内容も「という」を介在させて「子どもたちが笑うという声」とすると奇異に感じられる。

英語でこのような日本語に相当するのが、that 節や to 不定詞の形容詞的用法である。

(19) Some people hold a theory that smoking is a cause of cancer . (高梨健吉1970:545)

(20) He has no ability to do the work . (高梨健吉1970:464)

本考察は英語の分析を目的としないため詳細については言及しないが、(19)のように発話や思考の内容を表す場合には that 節が用いられ、(20)のように内容を表す場合には (of +) ~ ing や to 不定詞が用いられる³⁾。(21)にいたっては「笑い声」のように名詞で表されるのが通常である。

これは、内容といっても、動作主体を含むものから非常に名詞的なものまでさまざまなレベルが存在するためであると考えられる。調べた限りにおいては、この点に関する記述を含む英語参考書も日本語教育の参考書も見あたらず、また、管見の限りにおいて研究も見あたらなかった。

日本語では、「ティーチングアシスタントが日本語を教える仕事」のように、内容に動作主対を含めても言える場合があり、まだまだ解明すべきことも多い点であるが、ここでは問題の指摘にとどめておく。

2.5 限定的名詞修飾と非限定的名詞修飾

限定的名詞修飾表現と非限定的名詞修飾表現については、次節でも詳しく述べるが、ここでは英語との比較において例を挙げて簡単に説明する。

(22)給食を食べ終えた「人」は、校庭に出て遊んだ。

(23)給食を食べ終えた「田中」は、校庭に出て遊んだ。

(22)は、被修飾名詞「人」の中から「給食を食べ終えた」という性質をもつものが取り出され、その限定された名詞が主節の「校庭に出て遊んだ」の主語となっている文である。「人」という大きな枠の中から、性質によって真部分集合を切り出す表現、これが限定的名詞修飾表現である⁴⁾。

一方、(23)は、「田中」が、「給食を食べ終えた」という状況において、「校庭に出て遊んだ」という主節の動作に及んだことを表している。(23)は「田中は、給食を食べ終え、校庭に出て遊んだ」と言い換えても、基本的な事実に変更はない。

非限定的名詞修飾は、英語において「, ~ ,」で区切られた「非限定的関係代名詞節 (nonrestrictive relative clause)」で表されると説明されることが多い。英語における nonrestrictive relative clause とは、「省略しても主節の主名詞が確実に同定できる (we could just as easily do without the relative clause yet remain sure of

3) ちなみに web 検索で「英語を教える仕事」は ; work teaching English " work of teaching English ' などが見つかる。

4) 中学校で学習する関係代名詞は、基本的に限定的用法であるが、その説明には苦慮していることが多い。

() I have a friend and he lives in Tokyo .

() I have a friend who lives in Tokyo .

ある学習参考書では () と () を基本的に同じ内容を表すものとして提示し、代名詞と接続詞の働きを兼ねる語が関係代名詞であると説明している。しかしながら、() が表しているのは、「東京にいる」という意味で限定された「友だち」の存在であって、() とは異なっている。

the identity of the head noun in the main clause(Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1999:591))」と説明される。

(24) Mrs .Jensen ,who lives next door ,is a Girl Scout troop leader .(*ibid*:593)

(25) The climbers ,who reached the summit ,were exhausted .(*ibid*:593)

(25)においては、対応する restrictive relative clause である‘ The climbers who reached the summit were exhausted .’と比較して、「登頂に成功したのは全員である」ということである。

Nonrestrictive relative clause の機能に関しては、Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1999 : 594)に「主節の名詞の同定に関し非必須的な付加的情報を付け加える (provides additional information that is nonessential to determining the identity of a noun in the main clause)」ことが基本的な機能であると述べ、Quirk et al . (1985 : 1258)が、英語の等位節(coordination)や副詞的従属節(adverbial subordination)との類似を指摘している。日本語との対比においては、高梨(1970:177 - 178)が、継続(= 継起)、理由、譲歩、「～であるが」の4つの意味との対応を指摘する。

(26) I went to see Tom ,who showed me his album .(高梨1970 : 178) [継起]

(27) I cannot solve this problem ,which is very difficult .(*ibid* .) [理由]

(28) He proposed to the girl ,who disliked him .(*ibid* .) [譲歩]

(29) The horse ,which he keeps ,runs very fast .(*ibid* .) [~であるが]

対応する和訳として添えられているのは次のようなものである。

(26) 私はトムのところ遊びにいった。すると彼は私にアルバムを見せてくれた。(*ibid* .)

(27) 私はこの問題を解くことはできない。大変むずかしいから。(*ibid* .)

(28) 彼はその娘に求婚したが彼女は彼がきらいであった。(*ibid* .)

(29) その馬は彼が飼っているのだが大変早く走る。(*ibid* .)

いずれも対応する日本語においては複文として訳されており、非限定的名詞修飾表現を用いてはいない。おそらく意味関係を明示的にすることを英文和訳の技能として求めているのであろうが、このうち(27)~(29)は非限定的名詞修飾表現を用いて次のように表現しても同様の意味を表すと考えられる。

(27) 私は非常に難しい この問題 を解くことはできない。

(28) 彼は彼のことを嫌っている その娘 に求婚し(てしまっ)た。

(29) 彼が飼っている その馬 は大変早く走る。

(26)のように、英語の語順が出来事生起の時間的順序と平行している場合には、日本語として主節に先行する非限定的名詞修飾節に表現しにくいのが、そのような時間的逆行がない場合には、日本語でも非限定的名詞修飾表現を用いて表現すれば十分ではないか。特に、(29)のような注釈を与える場合には、(29)よりも(29)のほうがより自然に感じられる。

このように対応する場合もあるが、実際には、英語の nonrestrictive relative clause と日本語の非限定的名詞修飾の守備範囲はかなり異なる。

実際に小説などの用例を見てみると、(もちろん訳者の個性も反映しているのであろうが)英語の対訳には、nonrestrictive relative clause が用いられていないことが多い。

(30) 切り花が好きだった 祖母 は、いつも台所に花を絶やさなかったの、週に2回くらいは花屋に通っていた。(吉本ばなな『キッチン』p.12)

(30) Grandmother loved cut flowers .Because the ones in our kitchen were not allowed to wilt ,she 'd go to the flower .(“ Kitchen ”Megan Backus 訳)

(31) 私が帰宅すると、TVのある和室から祖母が出てきて、おかえりと言う。遅いときはいつもケーキを買って帰った。外泊でも何でも、言えば怒らない大らかな祖母 だった。(吉本ばなな『キッチン』p.31)

(31) 'When I came home ,my grandmother would come out of the Japanese -style room where the TV was and say ; Welcome home .’If I came in late I always brought her sweets .She was a pretty relaxed grandmother and never gave me a hard time if I told her I was going to sleep over somewhere or whatever .(“ Kitchen ”Megan Backus 訳)

(32) 今回も本当にギリギリのところまでこうしてあたたかいベッドが与えられたことを、私はいるかい
ないかわからない 神 に心から感謝していた。(吉本ばなな『キッチン』p.33)

(32) For having been granted such a warm bed after finding myself in the direst straits, I thanked the gods
— whether they existed or not — with all my heart. (“Kitchen” Megan Backus 訳)

すべてを統計的に見たわけではないが、少なくとも書きことばにおいて、日本語で非限定的名詞修飾表現が使われているほど、英語の対訳においては nonrestrictive relative clause は用いられていない。逆に英語では、聞き手理解の促進という意図を含め、話者による情報の後付けのような計画されていない話ことば的な性質が強いのかもしれない。このことは、修飾を受ける名詞と修飾節との語順を考えれば、何も不思議なことではないのかもしれない。

この点については、今回の考察では、先行研究を含めて十分に吟味しきれなかった。別稿にて詳細を述べることを期したい。

2.6 ま と め

以上見てきたように、日本語母語話者がはじめて構造的に名詞修飾表現について学ぶのは英語を学習する際であるが、その英語学習の場であっても、十分に日本語の名詞修飾の構造を理解して学習しているわけではない。

このように母語の名詞修飾という構造について十分な理解を持っていないのは、とりもなおさず国語の時間に名詞修飾表現を学習せず、さまざまな母語のしくみについて理解をしていない(また、教師の側にもそれを教える準備がない)ことが最大の原因である。

次節においては、このような名詞修飾表現を意識的に学習させるための方策を考えながら、国語の教科書の分析を行っていく。

3. 国語教科書における名詞修飾表現の扱い

第1節で述べたように、国語の教科書で名詞修飾表現を意識的に十分国語教育で活用できるほどのレベルで取り上げた検定教科書は、平成15年度版を見る限り見られない⁵⁾。しかし、実際の用例は教科書の文章に非常に多く見られる。

ここでは、前節で分類した名詞修飾表現の中から、特に問題となりそうなものとして限定的・非限定的2つの観点からを中心に名詞修飾表現を取り上げることとする。なお、取り上げた教科書のページは平成15年版のものである。

3.1 限定的名詞修飾表現

限定的名詞修飾表現は、前述のように、主節に述べられる名詞の範囲を切り取るものであるため、非常に多くの使用が認められるが、これとって問題になることは少ない。

(33) 実に、そのような力が知られているのは、今のところ、犬やねこ、ハムスター、うさぎ、馬など、昔から人間と親しくしてきた 動物 や、おとなしい動物です。(光村小3「動物とくらす」)

(34) 小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯 です。(光村小6「やまなし」)

(34)も「二枚の青い幻灯」という被修飾名詞は、内容という観点から限定を受けている。

しかし、次のように限定的名詞修飾表現であることをきちんと認識して読まなければならない場合も見られる。

(35) とうさんが
耳まですっぽり かぶせてくれた

5) 検定外であれば明星学園・国語部著の「にっぽんご」に、特に限定的名詞修飾について、「規定語」の名で文法的な位置づけがなされている(『にっぽんご4の上』pp.82-84など)。

毛糸のぼうし を通りぬけ

汽笛は しんしん聞こえます。(光村小5「月夜のみみずく」)

(33)は翻訳された詩である。特徴として、句読点がまったくないため、この連の2行目と3行目とのつながりが俄には判じがたいようである。実際に、「かぶせてくれた」で音声的にとぎれたり、また、次の「毛糸のぼうし」にプロミネンス(音声的卓立)が置かれたりして、「かぶせてくれた毛糸のぼうし」という限定的名詞修飾表現として読まれないことも多い。教室ではこのような限定的名詞修飾の音声的な特徴にまで配慮をした指導がされているであろうか。

(36)おまえは、一人で、夜道を医者様よびに行けるほど、勇気のある 子ども だったんだからな。

(光村小3「モチモチの木」)

(36)の被修飾名詞「子ども」を修飾する名詞修飾節は下線部である。この名詞修飾節には2つ読点があるが、実際には息継ぎをせずに読まなければならない。

限定的名詞修飾表現によって表現されるのは、被修飾名詞の下位分類である。言い換えれば被修飾名詞を「どんな」という性質で詳しく述べる働きを限定的名詞修飾表現はもつということである。

このことは多くの「書く」領域で指導のひとつの観点となる。たとえば光村小3の教科書には「せつ明書を作ろう」という単元があるが、まさにこのような場合、連体的な修飾句の1つとして、限定的名詞修飾表現を使用することで「詳しく」説明することが可能になる。

(37)安全のため、長ズボンをはく。(光村小3「せつ明書を作ろう」)

(38)鉄ぼうか手すりにつかまって、サドルにまたがる。(光村小3「せつ明書を作ろう」)

(37)(38)は、これで十分であるが、「少し生地の高い長ズボン」や「腰の位置ぐらいの高さがある鉄ぼうか」などとすれば、より詳しい表現が可能となる。必要以上に詳しくする必要はないが、「どんな ?」と質問することで、より詳しい記述が促せる。

3.2 非限定的名詞修飾表現

表現として読み取る場合にも、非限定的名詞修飾を正しく理解することが大切である。ここでは、実際に小中学校の教科書で用いられている非限定的名詞修飾表現をいくつか取り上げて、その解釈をする際に、このような名詞修飾表現に関する文法的知識がどのように役に立つかを、具体的に考えてみたい。

(39)それに、とうげのりょうし小屋に自分とたった二人でくらしている 豆太 が、かわいそうで、かわいかったからだろう。(光村小3「モチモチの木」)

(40)父のもりを体につきさした 瀬の主 は、何人がかりで引こうと全く動かない。(光村小6「海の命」)

(39)(40)は、名詞修飾表現を用いず、次のように述定しても、さほど意味が変わらない。

(39)それに、豆太がとうげのりょうし小屋に自分とたった二人でくらしているので、かわいそうで、かわいかったからだろう。

(40)瀬の主は、父のもりを体につきさしてはいたが、何人がかりで引こうと全く動かない。

なお、継起の一種であると考えられるが、後件が働きかけの表現の場合、「たら」で述定可能であると思われる次のような表現も見られる。

(41)できあがった せつ明書 は、みんなで読み合ひましよう。(光村小3「せつ明書を作ろう」)

しかしながら、山田敏弘(印刷中)でも詳述したように、談話機能まで考慮に入れると、まったく同義に置換可能である場合は少なく、やはり文章上の要請があって用いられていると言った方がよい場合も見られる。

(42)でも、次の朝、はらいたがなおって元気になった じさま は、医者様の帰った後で、こう言った。(光村小3「モチモチの木」)

(43)市の帰りに、おみつさんは、またあのお店の前を通りました。ほかのお客にまぎれて、ちらりと目をやると、赤いつま皮の雪げたは、朝と同じ所に、ちゃんとぎょうぎよくなっています。(中略)
家に帰った おみつさん は、思い切って、お父さんとお母さんに、雪げたのことをたのんでみ

ました。(光村小5「わらぐつの中の神様」)

(42)は、「次の朝、じさまははらいたがなおって元気になり、医者様の帰った後で、こう言った。」としても、状況としては大差ないように一見感じられるかもしれない。しかし、非限定的名詞修飾表現を用いないと、「次の朝」の出来事として「はらいたがなおって元気になった」ことと、「こう言った」ことの2つが並べられているように感じられてしまう。

(43)も同様である。(43)では「(おみつさんが)家に帰った」ということが名詞修飾表現によって表されている。この節を名詞修飾を用いない述定表現にすると次のようになる。

(43) おみつさんは家に帰って、思い切って、お父さんとお母さんに、雪げたの事をたのんでみました。

接続助詞「て」による表現はさまざまな意味をもつが、この場合、後件(主節)が意志的な動作であれば、テ節も意志的な動作と解釈されるのが普通である。すなわち「おみつさんが自らの意志でもって家に帰った」ということが、非限定的名詞修飾表現を用いた(43)よりも、(43)のように述定表現としたほうが、より読み取りやすくなってしまふ。

このような意志性の浮き上がりを今措くとしても、複文によって表現される場合、1つ1つの動作が継起的に行われたことが、テ節による複文は名詞修飾節よりもより際だって表現される。この場合、「おみつさんが」が「家に帰った」時点が問題となっている。つまり、ここで表現されている「家に帰った」は、「おみつさんは何をしたか」という問いの答えとなるべき出来事ではなく、「おみつさんはいつ主節の動作を行ったか」という答えの答えとなるような、背景的状况を表すものである。

同じように、次の文章でも名詞修飾表現は必然性をもって用いられている⁶⁾。

(44) (団長に四回宙返りをすればいいと言われて) キキは、サーカスの休みの日、だれもないテントの中で何度か練習をしてみました。でも、いつももう少しというところで、ブランコに届かず落ちてしまうのです。(中略)

「およしよ。」

練習を見にきた ピエロの口口 が、キキに言いました。

(三省堂中1国語「空中ブランコ乗りのキキ」)

最後の文、「練習を見にきたピエロの口口が、キキに言いました。」は、非限定的名詞修飾を使わないで表現することは難しい。「ピエロの口口が、練習を見にきてキキに言いました。」とすると、時間的に「練習を見にきて」がどこに位置づけられるのかが変わってしまい、口口が前段落に述べられているキキのブランコ練習を見ていたことにはならない。非限定的名詞修飾節が主節の背景となる出来事を表すということは、被修飾名詞である「ピエロの口口」という名詞が主節の動作を行うときにどのような経歴(基本的にタ形)あるいは予定(基本的にル形)をもっているかということである。この場合、経歴として主節動作に時間的に先立つ動作、しかも直前ではなく、さらに前の動作を表すには、非限定的名詞修飾表現を用いざるをえないのである。

なお、非限定的名詞修飾を使わないで「ピエロの口口が、キキに言いました。」と言うこともできるかもしれない。この場合、「ピエロの口口が練習を見ていた」ということは、ことばとして表現されていない。そのため、練習を見ていたからこそいたたまれなくなったという口口の心情は表せない。

このように、非限定的名詞修飾節「練習を見にきた」は、前段落に示されているキキの過酷な練習と口口の発言を結びつけるためには必須不可欠なのである。

このように非限定的名詞修飾表現を用いないと、表現の意図が変わってしまう場合も少なくないが、表現意図の違いが微妙な場合もある。

(45) 出征する前の日、お父さんは、ちいちゃん、お兄ちゃん、お母さんをつれて、先祖のはかまいりに行きました。その帰り道、青い空を見上げた お父さん が、つぶやきました。(光村小3(上)「ちいちゃんのかげおくり」)

この場合も非限定的名詞修飾の用法があるが、これは、次のように言い換えてもほぼ意味に違いはない。

6) (44) (45) (46)は、すでに山田敏弘(2004: 84 - 85)でも述べたことである。

(45) 'その帰り道、お父さんが青い空を見上げてつぶやきました。

(45)は「空を見上げる」と「つぶやく」が継起的に描かれている。非限定的名詞修飾構造を用いると「空を見上げた」という出来事は「お父さん」の背景へと押しやられ、主節で述べられる「つぶやいた」が強調される。つまり、「帰り道、お父さんは何をしたの?」という問いに対して、(21)であれば、「つぶやいた」のであるが、(21)であれば、「空を見上げてつぶやいた」のである。

情景として連続する動作と捉えるか、または「つぶやいた」を強調したいか、それは筆者の意図に任されるものであろう。

最後に、より大きな文脈で、名詞どうしを対比するために非限定的名詞修飾表現が用いられている場合を見ておこう。

(46)人口7,400人の小さな町、宮崎県の綾町では、町の憲章の中に、「自然の生態系を生かし、育てる町にしよう。」という言葉をかかげた。(中略)

また、33,000人の市民が暮らす **山形県長井市** では、「生ゴミのたい肥化」の計画が進められている。(中略)

何十万、何百万もの人が住む **大都会** では、自分たちの生活と土地や環境全体とのつながりを実感していくことは難しい。(後略)(光村中1国語『めぐる輪』の中で生きる)

(46)で比較されているのは人口規模であり、人口規模を対比的に表すために非限定的名詞修飾節が文頭(実際には段落頭)に並べられている。最初の段落では、「人口7,400人の小さな街」と「宮崎県の綾町」とは、いわゆる同格の関係になっているが、同格とは指定辞を述語とする「AはBだ」の非限定的名詞修飾表現と考えることもでき、対比的に示すという働きは同じである。

非限定的名詞修飾節は、解説文などで対比的に背景的情報を提示する有効な手法としてもよく使われる。

名詞修飾表現の中には、限定的名詞修飾表現であるか非限定的名詞修飾表現であるか、必ずしもはっきりしない場合もある。

(47)じさまは、ぐっすりねむっている **真夜中** に、豆太が「じさまぁ。」って、どんなに小さな声で言っても、「しょんべんか。」と、すぐ目をさましてくれる。いっしょにねている一まいしかないふとんを、ぬらされちまうよりいいからなあ。(光村小3「モチモチの木」)

いずれにしても、限定的・非限定的と分けることが重要なのではなく、「何が言いたいか」「どう詳しく述べているか」という観点から、書かれた文章を見てみる必要があるのである。

3.3 その他の名詞修飾に関わる問題

すでに別稿(2001b)でも指摘したことであるが、名詞修飾表現によって構文的に複雑な表現となっている場合がある。

(48) あいてのだした **かあど** のこたえからはじまる **かあど** をだします。(啓林館小1算数)

(49) 次の2人の考え方で求められる **わけ** を話し合しましょう。(大日本図書小6算数)

(48)は二重に名詞修飾が用いられている表現である。日本語は後へ後へと限定を加えていくことが可能であるが、このような複雑さは気づかれにくい。一方、(49)のような表現はかくれ疑問文である。「どうして～求められますか? 話し合しましょう。」としても同義である。

場合と、それを読む児童の日本語の力を考えながら、適切な表現が用いられるよう考えることも必要である。

4. 児童・生徒の作文に見られる問題点

最後に児童・生徒の作文の中に見られる名詞修飾表現をいくつか検証することによって、どのような指導が可能であるかを考えていきたい。

4.1 限定的名詞修飾表現の効果的な使い方

限定的名詞修飾表現は、文脈にある名詞を新規に導入する際、どこまで限定して導入するかが問題となる。

(50)ぼくはカメがいる場所をしょうかいします。

学校からの行き方はまず、歩道橋をわたります。つぎにJTのつき当りで右にまがります。車がおっています。車がおっているところを左にまがります。そしてずっとまっすぐ行きます。

ようち園をこえます。

そしたらペコちゃんレストランもこえます。ずっとまっすぐいくとあります。

その場所の様子は、川はほそくて水はきたないです。川の中には岩がたくさんあります。川の中はすなもあります。

カメは十ぴきぐらいいます。

カメの大きさは、二十センチメートルぐらいの大きさです。カモもいます。とくに知ってほしいことは、カメとカメがいっしょにおよいでいます。とてもかわいいカメです。おとしものを一つおとしたらもうひろえません。とてもあさい川です。カメがいるすてきな川なので一ど行ってみてください。

これは小学校3年生児童の「カメがいる場所」を紹介する作文である。新規に導入するべきは、すみかとしての「川」と、その川にすむ「カメ」であり、これらは存在を表す文で示されなければならない。

(50)[行き方の説明] ずっとまっすぐいくと川があります。[川の説明] 川の中にカメがいます。

[カメの説明]

太字で示した2つの名詞は、導入の存在文「[場所]+～がある」「[場所]+～がいる」で表される。この2つの導入された名詞だけでは簡単すぎるので、直後に示される川およびカメの説明に関する記述を限定的名詞修飾節を前接させて限定することが可能である。

(50)[行き方の説明] ずっとまっすぐいくとほそくて水がきたない **川** があります。[川の補足説明]

川の中に **二十センチメートルぐらいの大きさの** **カメ** があります。[カメの補足説明]

「ほそくて水がきたない」や「二十センチメートルぐらいの大きさ」は、存在を認識する際に必要となる付加的情報であり、単純に名詞だけで文脈に導入するよりも同定しやすくなる。その上で、いくつかの付加的情報をその後に列挙すればよい。

この作文が必要としている指導は、「どこに何があるか」の導入に必要な情報と、その導入されたものが「どんなものであるか」という付加的な情報とを、分けて書くということではないだろうか。そのためには、時間的順序にこだわった作文よりも、まず、(50)のような導入の存在文で骨格を作り、それに(50)のような肉付けをし、さらにその場所への行き方を書かせるという、文章の骨格に十分配慮した授業での作文指導法を考えていくべきであろう。時間軸上に整理しただけでは、「何が言いたいか」は見えない。

次のような例も同様である。

(51)そこで、2つの公園に行ってみました。岐阜公園と北の公園です。まず、北の公園には、大きい木が14本あって、小さい木が3本ありました。回りを囲むようにありました。近くの公園です。

(小4)

細かいことは重複するため省略するが、ここでは「2つの公園」の導入と、そのうち「北の公園」についての描写が行われている。骨格をなすのはこの2つである。「木が 本あった」コト、「その木が回りを囲むようにあった」コト、「その公園が近くにある」コトの3点のうち、背景化しやすいのは最後の情報であり、これを限定的名詞修飾表現によって「北の公園」に前接させることによって、「公園の木」について説明した後でまた「公園」について情報を付加するという視点の蛇行から解放される。また、存在をあらわす「ある」の重複を排除することで、次のようになる。

(51)そこで、岐阜公園と、**近くにある** **北の公園** の2つの公園に行ってみました。北の公園には、大きい木14本と小さい木3本が、回りを囲むようにありました。

児童の作文では、どうしても頭に浮かんだ物事から書き連ねていってしまう。そのため、(50)と(51)のよ

うな、聞き手を意識し文脈へ導入するという配慮ができないことが多い。小学校の中学年にいきなりこのような作文を要求するのではなく、推敲の段階で教師が言いたいことの流れができているかという観点から指導すればよいことである。

児童の作文が頭に思い描いたことから書いていく傾向が強いことは、主題としての捉え方にも反映している。

(52)そして花は、古い の がたくさんあるし、ほとんどくさっていました。(小4)

(53)空海は当時、位の高いお坊さんで、中国で仏教の勉強をし、その後、日本に仏教を広めた 人 です。(小4)

(52)と(53)も、実質的な名詞性の低い「の」や「人」が被修飾名詞となっている。

(52)の場合、より広い視野「花」から、限定されたもの「古い花」への視線の移行が、まさに限定的名詞修飾という構造を効果的に用いて表現されているとも言えそうである。しかしながら一方で、同一の名詞句を指し示すのに冗長的な「の」という助詞を介している点で、より計画的に発せられた発話であるという印象は小さくなる。「[存在場所二八]古い花がたくさんありました」などとすることも検討した結果、やはり「花」全体を見渡した中で、「古い花」へと視点が移行したのであればそう表現するという思考の過程が大切なのであろう。

(53)については、「空海」の説明として「お坊さん」という名詞述語に結びつけるのであれば、「位が高い」、「中国で仏教の勉強をした」、「日本に仏教を広めた」という3つの述語によってどのような限定がされるか検討をすることもできるのではないだろうか。この場合、もっとも本質的な性質である「位が高い」は名詞句の直前に置き、「空海は中国で仏教の勉強をし、その後、日本に仏教を広めた位の高いお坊さんです」のような文章とすることができる。

もしくは、「空海は、位の高いお坊さんで、」と始めるのであれば、最後は「～広めた人です」とせずに、「広めました」と動詞述語文で終わることも検討されるべきであろう。

前者は「空海ってどんな人？」の答えであり、後者は「空海は何をしたの？」の回答である。何が問われているかを考え、述部をどう終わるかを考え、名詞修飾節を適切に用いたい。

最後に複文との対照において限定的名詞修飾表現の使用の是非を考えてみたい。

(54)買ったアイスクリームは、しょう花どうの左にベンチみたいないすがあるので、そこで食べられます。(小3)

(54)は、波線部が原因・理由を表す従属節となっており、その中で「ベンチみたいないす」が導入され、それが二重線で示した場所を表す指示詞「そこ」の内容を補充している。つまり、「ベンチみたいないす」=「そこ」であり、「買ったアイスクリームは、しょう花どうの左にある ベンチみたいないす で食べられます。」とすることによって、名詞的要素の繰り返しという点でも、また接続助詞の使用という点でも、冗長性が回避される。

もちろん、これまで述べてきたことは1つの可能性に過ぎない。もとの文章のほうが子どもらしくてよいということであれば、そのような主観的な評価を否定する道具とはならない。しかし、客観的に見た場合、限定的名詞修飾表現を用いた表現のほうが、より導入がスムーズに行え、冗長性も排除できるというメリットがある。少なくとも、選択肢の1つとして、示さないよりは示した上で児童生徒自身がどちらがよいかを表現すればよいことである。

4.2 非限定的名詞修飾表現の効果的な運用

次により年齢が上の生徒の作文を見ていく。

高学年以上では、前節で見たような限定的名詞修飾表現の稚拙さが、まったくないというわけではないが、相対的に減ってくる。これは、やはり年齢が上がるともに、前後の文脈への配慮がより広範囲に及び、

同時に情報の処理が行われるためであろう。

そんな中でも、主筋と脇筋をはっきりさせることで、言いたいことがひとつにつながって見えやすくなる場合もある。

(55)(沖縄からアジアが見えるを読んで)

最近では沖縄などの南国に魅了される人が多いことがわかる。南国の風土や気候を求めて旅行する人も多い。今では旅行だけでなく、音楽や文化などもブームとなっている。

沖縄には日本独自の文化とはちがったところがあるから魅了されてしまうと思った。

沖縄は日本よりも朝鮮半島との交流が昔から深く、日本より朝鮮半島や中国の文化を取り入れていて、今でも残っていることが多いとわかった。(高2)

この文章で言いたことは何であろうか。「沖縄」を主題に分かったことを列挙していくという、読書感想文にはよくある書き方であるが、この後、さらに朝鮮半島とのつながりについて述べていくのであれば、第1段落と第2段落に表されている多くの情報が「主として言いたいこと」からは外される。ここで述べたいことは、「沖縄の文化が人を魅了すること」「それは大陸や朝鮮半島に近いことではぐくまれた独自の文化のため」という流れであろう。

非限定的名詞修飾を用いることだけが、唯一の主筋の浮き立て方ではないが、この筋をはっきり分かりやすく示すためには、次のようにすることが考えられる。

(55)' 最近では南国沖縄に魅了される人が多く、南国の風土や気候を求めて沖縄を旅する人も多い。沖縄の音楽や文化もブームになっている。

このように人を魅了する沖縄独自の文化は、朝鮮半島や中国の文化を取り入れた結果であると、本書は語る。

(55)'は、第1段落を「沖縄」について述べ、「このように」でその内容を受けた第2段落で、その文化の由来を述べる。こうすると言いたいことがよりはっきりと表される。

これは一例に過ぎないが、作文ではやはり「筋」というものが大切である。その筋をはっきりさせるのは、従属節か主節かという肉付けと骨格との使い分けである。非限定的名詞修飾表現はこのようなメリハリをつけるためにも効果的な運用法を指導すべきである。

5. おわりに

これまで、国語で教えられる現代語の文法は、目に見える形式の分類が主であった。現代語の文法の学習は、それがいくら先々古典の時間に役に立つとは言われても、今、役に立つかも分からない分類を覚えさせられることで文法嫌い(もしくは誤解した文法好き)を生み出すだけであった(もちろん、学校の口語文法は古典文法への導入としての性格が強いので、この批判自体が当てはまらないと言われればその通りであるが)。

また、近年の現代日本語研究の成果が国語の文法教育に応用されることも極めて稀であった⁷⁾。現代日本語の文法研究者の中で国語教育を視野に入れた研究をしている人の数も少なく、そのため、国語教師には空論をこねくり回しているようにしか映らなかったのもしかたがない。双方の間には越えがたい溝があった。

しかしながら、世の中は国際交流の時代。日本語を内からだけ捉えているわけにはいかないことは、英語教育を持ち出すまでもなく事実である。他の言語と相対的に日本語を見つめる目も確実に必要とされてきているのである。溝を埋めるには、どのように使えるかを具体的に示す以外にない。

今回取り上げた名詞修飾は、まさに形としては現れないが、外国語と対照すれば分かるように、重要な表現方法である。昔習ったような「するところの~」のような、たとえそれが漢文訓読の伝統をある

7) 言語学研究会の活動は中でも特筆すべきものであるが、一般の学校での教育に受け入れられた考え方は、非常に限定されたものに留まるのが事実である。

意味引き継いでいたとしても現代語としてはやはり日常使われる表現ではない奇妙な翻訳調の日本語ではなく、本当の日本語としての対応を考えていくためには、国語の教師も（英語の教師も）やはり日本語について学ぶことを怠ることはできない。

国語の授業は、「正しい」日本語を考える責任を担っている。これは、「～になります」や敬語の誤用だけをやり玉に挙げることでないことは、聡明な教師であれば分かっていることであろう。教師はそれを認識し、言語として「正しい」内容の日本語を教えた上で、教える方法論を磨くべきではないだろうか。

「国語の文法は授業の役に立たない。」これは、ひねた、能力のない教師の言い訳に過ぎない。授業で文法を対象として教えずとも、手段として備えた上で行われる授業を多くの教師に望みたい。

参考文献

井上和子（1976）『変形文法と日本語・上』大修館書店
 黒田成幸（1999）「主部内在関係節」『ことばの核と周縁』くろしお出版
 白川博之（1987）「ケース19 連体修飾」「ケース20 連体修飾」『ケーススタディ日本文法』おうふう
 高梨健吉（1970）『総解英文法』美誠社
 寺村秀夫（1975）「連体修飾のシンタクスと意味」『日本語・日本文化』4、大阪外国語大学留学生別科
 長原幸雄（1990）『新英文法選書第8巻 関係節』大修館書店
 益岡隆志（1997）『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版
 山田敏弘（2001a）「§29 名詞修飾表現」庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
 山田敏弘（2001b）「小学校教科書に見られる非日本語母語学習者にとって難解な表現～複文表現」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』50 - 2
 山田敏弘（2004）『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版
 山田敏弘（印刷中）「非限定的名詞修飾表現の機能」『岐阜大学国語国文』32号
 レー・パン・クー（1988）『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版
 Celce-Murcia, Marianne & Diane Larsen-Freeman(1999) The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course "(Second Edition). Heinle & Heinle: Boston
 Keenan, Edward L. and Bernard Comrie(1977) Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar. 'Linguistic Inquiry' 8-1
 Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik(1985) A Comprehensive Grammar of the English Language. "Longman